

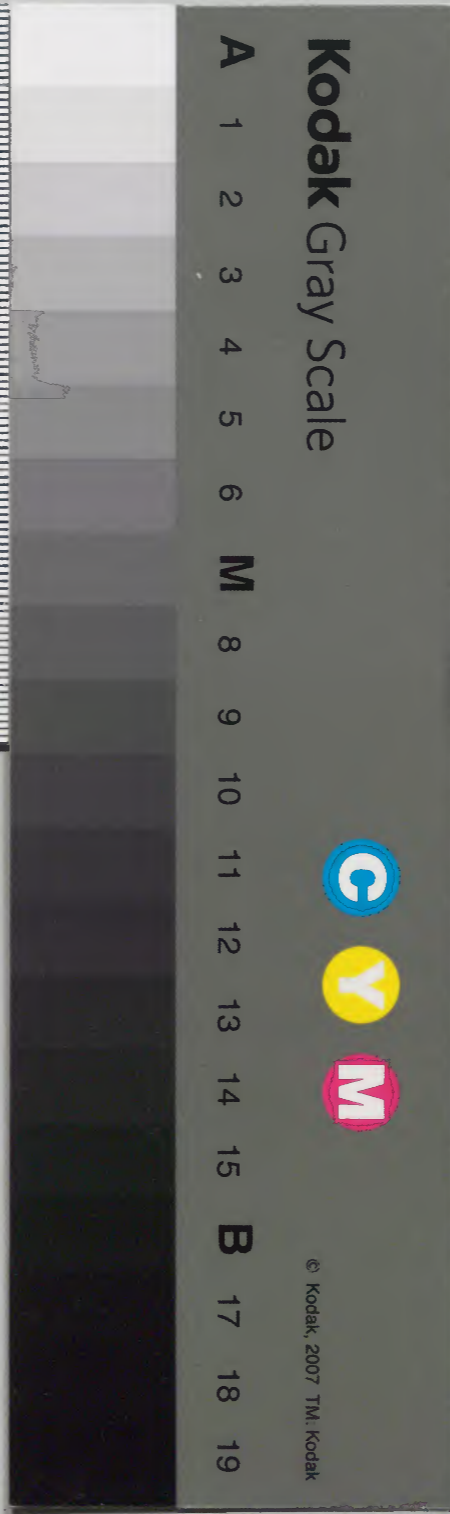
筆満加勢

五十九

和書門類			
二七九七六號	八七函	六架	六〇册

内閣文庫		和書類	
二七九七六號	八七函	六架	六〇册

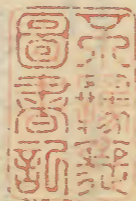
内閣文庫	
番號	和 27976
册數	60 (54)
函號	214 9



筆果之坊

五十九

手紙此



時十

明治十三年

物々としてありけり。宿を。庭と海と。形々として。何と海と。
高き。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
たぐと。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
ふと。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
やと。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
ぬ。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。
木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。木あり。



そのすぢをあらむはむしてあらうやましくてありぬまはうきまはひ
 すくぢうしきたのゝあぢむと申ししむらゝ人のふぢけはあはれ
 人しきうまのいふまふしはあぢむらゝやむらゝおのぢき
 すぢをいふはまふぢけはいつくもたぢけうぢけすぢけたり
 わぢれと人しぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 うちまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 てもつひ人のこゝろまゝのぢけまゝに人のぢけをいふはいつくも
 のぢけまゝに人のぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 うぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ

リハハ明ふはばむとあぢむはいつくもたぢけまぢけうぢけ
 うぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ

あぢむらゝあぢむらゝあぢむらゝあぢむらゝあぢむらゝ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ

ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ
 ぢけまぢけうぢけまゝに人のぢけをいふはいつくもたぢけ

かきくろふるありくはあはし手ひあえしそあき海しとわさひ
にたけしあはれまをさ酒かへけきあそく酒さあせらやたいあ
らうまうくくく心しあそそ人かわゆるまひしくまやまの
んぞわやうくく様しとわさひとあきくあうけあうしつし
あそわもあうめまにめとあうりりああそそすさああ
うまてああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ

はらりくは年月経ても日あらはれたる人たはまかりくゆ
せろねにちゆり此は日わあそそあててとわさひまたけうあ
す様あそそもあああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ

めのよめ...
 ふむと...
 ころこ...
 あそび...
 いら...
 ころ...
 あそび...
 いら...

あらび...
 ころ...
 あそび...
 いら...
 ころ...
 あそび...
 いら...

ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ
ゆふらうくふかききたるころにまづけやうしたまふ

こゝろはえいもやうまたたりあをまきりこゝろはえいもやう
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり
またたりあをまきりこゝろはえいもやうまたたりあをまきり

小む孫あふりてえいよき流のしりめごとく
もやしらんをすくき旅人のうたのしりめごとく
とと月よきしりめごとくしりめごとく
うちそなたをうくとあかしのうたのしりめごとく
うぶおとくしりめごとくしりめごとく

[Faint bleed-through text from the reverse side]

花き松

[Faint bleed-through text from the reverse side]

後醍醐天皇

護て南朝の時曆を考へて延元二年後醍醐帝五世

に潜幸ありて元暦九年北朝の後龜山帝

後小松院を河野子に遷すは種々神室にたしむる

まをすを代すて貞享七年也まをすを後村上帝

の御子長慶院をたすて四代とすはあつたはる新皇

集序云わく元弘のちしえより志力弘和の令にける

よし世にのりてふいそと智とまをすはるる後醍醐

後村上帝後龜山院是之より後醍醐帝をのぞく

昔も法村と長慶法師の山に三帝といふ事ありんば
のしり免しと云せ給ふべし法又天授山後元年五
番款合に前大御言有

おとよや三代に御言をいひのや
雲井岩と照しあるをふれんとは

園白

のやまもあつたけりて三代まで
三帝の御言をいひのや

し和守三代と云ふ歌あり或人曰法村と三帝正平
才三平三月山崩御事せ給ふべし身一の白子實
成長慶 信つとせ給ふべし御言成山後 三帝をたてし
白子孫とて給ひ文中三平八月二帝位ありける
し花雲三代紀に及べし御言今長慶帝と
御言をいひて三代と云ふ事云實成三帝と
小福忍守殿下の御女が松門院の御後多し
是れ三帝實成と云ふ事とて三帝成と云ふ事

よしの地ふくむし 新集集巻上云今上の御まは
ましゆるといふ家よりけりたる 梅の花とちりてまのとき
福忍を初実の内を臣

いとよきかたてにまはしゆのまこと
あさうくまほく 名の梅く

御巻御製

春のうねはあたしと句を能まは
わさやうは海に花の梅は

同集巻部云とにおましと多時内裏を人々
題をとりて西きおつるまけりけり時
梅を御製

いづも世もくはるに句くまは
初る春もくはる梅くえ

しんまの二さハクふくは言防河とて海音とらふん
涙の御製まもりつるまはくむとまはく一のま子
に何くはくといふまはくまはくまはくまはく院

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

御集の正平は三年八月つ初めしりし御集の正平は三年八月つ初めしりし

いふ題と溝せうとほりてはし 河製

十の角のの花さくてしと比きさひ

けの世のしるは河ひあむのま川

是代初め御製と名くたり又曰集初る中宮女御

もそおひしるるうらりおまふの技をまもり習はひんぬ

いふ在門院

君うらや河の宮井にうづる言

ふれとを おまふの色よさらせし言

在門院河集云建徳二年ある月の末川さひの

大形おまははのふまふのりりたりしとまを地を

りりし何とある河自とありのん比しをま 女御殿より

河ひせしれたし河をのり

君うらや河のま井はははの言

河ひも おまふの色よさらせし言

とりたれたりし河をのりし門の四方より

地しておまを枯らしとせよめくるとか

しるるの山岩とるのよまらう言

是書を合せ有るに四年七月二十日傳つて終つて
弘和元年新葉集を撰るにヨリ一より
すし遷居のころありしに或人又云元
申二年九月十日天皇の宣成と主を給り辰
年の涉部文今現に吉野山今劉岩寺に有る帝位
よつて終つてハ古と天皇の号ありしに以て云ふ曰小
一條院の御例 弟冠物作撰書を化 玉を 玉宮より遷り
古鏡裏書一依御記
古とて今と終つて遷りて故より一細沙院号にあり

乃く也慶とつて終つて追号ありしにめりたりと云ふ
用りしに又け堀江初玉川の山牛と云はれ居る終つ
中玉門宮と号は法門跡傳よるを古傳に玉門
宮男後院御記号終つて何し帝位のころ宮跡を記
終つて此のころにたりしに或人又同云はれ居る
系圖たりしに今何しと云ふに福慈寺の号白如と終つて
是を曰新葉集新葉に云はれ居る院也而とつけられ
八月十五夜家子十五番夜合し何しと終つて終つて
るしと云ふ何しと云ふに福慈寺の号白如を記

不承しくは秋の宮井にすまひのあり
いづれをまよふ雲の上の月

秋の宮とは中宮をいふ也御まをいふは
何んことを移しは後す承りては御も何ん
しりては多時家の梅をたぐりてまをせ
あまがたは

天保八年十月上旬

検校係己一歳

日九十月

丹羽乃海師字

角田川埋木記

入居の多きを世に付長むと云ふ所の
瑞瑞と云ふといふ所のまゝと云ふと九とせを
のうまは奥の所と云ふ所の天文の中
氏康親のまゝの記も瑞ありと云ふ
しやく後一多一又と云ふ人のつ
高とせしに忠氏わつと云ふち瑞
所来せし又真保のまゝと云ふ
りていふと云ふと云ふと云ふと云ふ

いふまゝといふたい瑞と云ふ
と云ふたをてりれそといふ
木と云ふてと云ふと瑞のあり
とりはしと云ふハ水神のまゝと
あるといふてのふまゝハ
わくとして土版二般と云ふ
まゝといふてぬきと云ふ

文化十一年正月一日のりきそそ

源弘賢

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

考證

源平盛衰記羅卷云治承四年十月三日兵衛佐
頼朝、平家、軍兵東國へ下向、由聞給テ武藏
ト下総トノ境ナル住田河原ニ陣ヲ取リテ國ノ
兵ヲ被招テリ爰ニ武藏國住人江戸太郎桂西
三郎一類春属引率ニテ泰タリテ、江戸桂西
ニ仰テ淳橋渡スヘトト下知セラレ江戸桂西ハ石
橋ニテテ佐殿ヲ射奉リシ事ヲソレ思ヒケルニ北
仰ヲ蒙リテ悦ヲ成ニテ在家ヲコホナテ淳橋

尋常ニ渡シタリノ軍兵是ヨリテ渡シニハ武蔵國
豊嶋ノ上瀧野河松橋ト云所ニ陣ヲ取テ
平家物語長門ノ云物高佐氏就國ト下後國との
ミウハ隅田川のナリニ陣ト云テ又ミウミウミ
派ノミウミウセリシ橋ヲ渡シテ武蔵の國
清ノ上瀧の川ノ松橋ト云テ下陣ト云テ
吾妻鏡ノ六十目ノ幸也民衛相増テ常流
廣常ト云職派本井瀧田西川ト云テ
天保和評集卷第廿五橋部ノ事

名所奇中

光俊報臣

すも川黄ひきし人今こそハ身をこも橋のありあけり
けりか原元二年唐島社ノ橋をりかすも川の海ノ
をんまふかの渡今ハ浮橋をこもりかりけり
梅花無盡藏卷第ニ江上春望詩自注云隅田在氏
藏下送四國之間路傍小塚有柳道灌云為攻下
送之千葉橋長橋三條其所号橋場
弘賢曰録名大冊子ニ云ルニ千葉ヲ攻メハ
天明十年ノ事ナリ 梅長橋三條ノ事ニ誌シ
土人の口碑云ニ一百年もくくくニ岩家の直家首
ありとの松子土橋をわけては来せしあり

或人曰享保年中大久保伊勢守屋のふけりありて
湯田川に舟をこらけりしものなり

淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...
淡路守保元元年六月廿七日...

憲民奇御合

廿二角のた神といふものおとしきものをのたり
谷川氏社訓 粟谷身三 庄い 曰た神の義四國
より何れ志人を害はた大盪す」といふしと
の國は少くも世に五を 搜神記卷十二
^{十葉} 曰 鄱陽趙壽有大盪時陳岑詣壽忽
有大黃犬六七羣出吠岑後余相伯歸與
壽婦食吐血染死乃盾拏揅以飲之而
愈盪有怪物若鬼其姪祇變化雜類殊種
或為狗灰或為盪蛇其人不自知其狀行
之於百姓所中皆死

蠅營たる物苟と韓退子のせりま

高風曰蠅營乃文字をそつとと音をか
とつとつといふやや ヨウエイとよや
ソツハル又韓退子のせりまといは概を比か
といひをありて韓退子の世文さうりまをえ
は韓退子の韓子といふまほしと人韓退子
韓退之の韓子といけり 押雅卷五 四葉
康熙字典 己集下九葉右 ふといはけ又を引け
韓子曰とせりまをたけ韓退子のと
つらえあやまらしといはるんまをて蠅營

物苟の純字は韓退之文集第卅六 萬曆板 八葉右

送窮文に朝悔其行暮已復然蠅營物苟

驅去復還」ともて蠅の營むる如く物苟を

み如くと訓はつとありまは蠅營たる物苟と訓

してかちきに文義あるをいふたてヨウエイク

といふて文意子のあふへ

りんむかんてい

淵鑑類函第四百卅六 卅七紙 右物三 引白澤書曰

黒狗白頭長耳卷尾龍也
引廣志曰物

引廣志曰物
有懸蹄旋尾之類

秋北斗をとりし心の子に安を

酉陽雜俎第十五白華右諾曰舊說野狐名

紫杭夜敷赤尾火出將為怪必戴鬪體拜
北斗鬪體不墜則化為人矣

太平廣記卷四百五十四右葉劉元鼎傳引酉陽

雜俎載此事

三 須江や池のう鏡

狂言記第二太平四葉曰是下世ありすまい侍る

古杭ありしやうきる行子世山の阿あし子獺原

のい秋おの一門を釣たしりるゆりては何とそして

彼ら釣ふぬやうにとおまひに彼らゆえ申坊主に

白蛇をとりてはさる行子は化か多しとて

ま見えをくらし殺生の道をわとひて白くせし

と知りてある何と白蛇をとりし似たりと

ぬまての糸鏡と見ゆせむあまほあまほ
似くくすふふ先能くはへいそそまらる
かろくむせ深きくくけつ

玉世深を身のよりとけりふふ之ゆと夢死を
五形をそほふりあり 太平廣記卷四百五十一
右七僧晏通傳曰晋州長安縣有沙門晏通修
頭陀法將夜則必就叢林乱塚寓宿焉雖
風雨露雪其操不易雖魑魅其心不搖月
夜棲於道邊積骸之左忽有妖狐踉蹌而至

初不虞晏通在樹影也乃取羈鞶安於其首遂
搖動之僅振落者即不再顧回別選焉不四五
遂得其一岌然而綴乃裹擲木葉草花障其教
形體隨其顧盼即成衣服須臾化作婦人集異

けしとありてまるとぬけんありのたのいかに
涅槃經卷第十五七葉曰善男子譬言如旣是乾時
錐刺於石可著頑腦堅硬三復如是雖一日夜
擊心不散難可調伏又如家犬不畏於人山林
野鹿見人怖走頭志難去如守家狗慈易矣

如彼野鹿

いぬおふもの

和訓栞本第二卷左曰大追物とハ弓道トイフ
東鑑下大追物と云々在リテ禮近衛院の御宇

あり侍ふと云

東鑑卷第五十一葉曰兼久四年壬午正月六日於南
庭有大追物若君御入興

武器考證卷十二曰案スルニ是ヨリ以前ノ卷ニ

大追物ノ事見エス此条ニ始テ大追物見エタリ然レ
トモ人テ日始テ行ハレシ赴トハ見エス是以前ニ始リ

之車ナルヘシ騎射秘抄ノ序ニ鎌倉右大臣之家ノ

御時權輿ト見エタリ然ラハ実朝公ノ時始テレ

之ナリ然ルヲ東鑑ニ記シ漏シタルナルヘシ

おの恨の志と云ふなり

恨の志と云ふなりと下の文字をともあま

死ふ人何と云ふと云ふ中ノに云ふやん恨ノ

志と云ふを菊乃と云ふの志と云ふハ下のと文字

あくせの御志之に云ふを菊と云ふ標台に云

たるはと云ふはあり侍冊子卷第二十一葉右曰昔ハ

獄前二載菊云藤云輔相中初言七良過獄前下

時獄囚入走出テ抱之入獄門内云朝ノ哥仙

之由兼之為題世菊可全詠一首云輔相即

詠云ひとるゑりのまやわひしのまのたらとと

ようつるゑりのまのま獄囚感歎ニテ免之云

貞女とまの法也大

流布の印本法也大註ちやせんいの法也大

目ろくふ人ハちやせんいん又ハちやせんけんを

うたふありしつとし探女のままハならまたふし一

正しくハちやせんいんハ法也也大

搜神後記第九二葉曰會稽句章平民張然左滯

役在都經年不得歸家有少婦無子惟與一

奴守舍婦遂與奴私通然在都養一狗甚快

名曰烏龍常以自隨後假歸婦與奴謀欲得

殺然然及婦作飯食共坐下食婦語然寧獨

當大別離君可強笑右手唐託然未得噉奴已張弓

拔矢當戶須然食畢然淚泣不食乃以盤中肉及

餘擲狗祝曰養汝數年吾當將死汝能赦我

否狗得食不噉惟注暗詆唇視奴然三覺之奴催

食轉急然決計拍膝大呼曰烏龍舉手狗應聲

傷奴矢刀狀倒叱物咋其陰然因取刀殺奴以婦付

縣殺之

けりるる子ありけりあまをさる張就ふたとかくも
たり本文抑るる美ゆふり太平廣記第百四十七
二葉右
又載之

楊清李信ふたとも

流布の印存本楊清とあり六張あり人揚生了改む

搜神後記第九二葉右曰晋太和中廣陵人揚生養

一狗甚愛憐之二葉右行止與俱後生飲酒醉行大澤

草中眠不能動時亦冬月燎原風執極盛物乃

周章踞喚生醉不覺之前有一坑水狗使走往水

中遂以身灑生左右草上如沙數次周旋踏去草

皆沾濕火至免林火生醒于見之爾後生因暗行

隨于空井中狗呻吟徹曉有人經過恠其狗向井

踞往視見生生日君可出我當有厚報人曰以汝狗

見與便當相出生生日汝狗曾活我已死不得相與餘

即無惜人曰若爾便不相出狗因下頭目井生和具

意乃語路人云以狗相與人即出之繫之而去却後

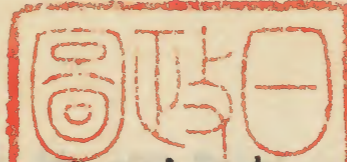
五日狗夜走歸二葉左 太平廣記四百七引紀聞

李修ふた

流布の印存本李修をさるる人と爲りたり

修ふた

搜神記第^四卷^右曰孫權時李信純襄陽紀南人也
家養一狗字曰黑龍愛之尤甚行坐相隨飲饌之
間皆分與食忽一日於城外飲酒大醉歸家不及
卧於草中遇太守鄭瑛出獵見田草深遣人
縱火燒之信純卧處恰當順風大見火來乃以
口掩純^三不動卧處北有一溪相去三五十步大昂
太守^姓入水溼身走來卧處周迴以身灑之獲
免^去大難大運水因之致斃于側俄而信純
醒^來見火已死遍身毛溼甚訴其事覩火踪
跡因雨慟哭聞于太守太守愷之曰大之報恩
甚于人人不知恩豈如大乎即命具棺擲衣



余表葬之今記南有義大葬
洞鑑類也引於
事葬作家可隨高十
餘丈

